

ト教という歴史的一宗教は、ナザレのイエスという一人物の献身的実存を手掛りとして、永遠について瞑想する。永遠への瞑想とは、永遠の時間への献身に対して、人間が有限の時空の中でその都度新たに応答して生きる態度であるということができ

## 「アーリア人イエス」の宗教史

久保田 浩

本発表は、ヴァイマル期・ナチズム期ドイツにおける「アーリア人イエス」という表象を、宗教(思想)史的文脈に位置付けつつ、同時代の宗教的所与に対する宗教実践的行為として分析するものである。

ユダヤ教的伝統に依拠して形成された「キリスト・イエス」という、イエス像形成の教義的参照枠を前提としないイエス像が現れてきた啓蒙期以降、特に一九世紀において、文献学的・歴史学的分析に基づく多様なイエス像(合理主義的、自由主義的、宗教史的、終末論的解釈)が提出されてきた。同時に、イエス像構築の為の史資料の検討が進捗した。しかしその結果、こうして提出されてきたイエス像の虚構性(イエス伝著者の倫理的理念の投影)、並びに、史資料の不在(マルコ福音書、Q資料の信仰告白的性格)というアポリアが現れてきた。これがヴァイマル期以降のイエス伝・イエス像構築の前提であっ

た。

まず、ヴァイマル期・ナチズム期のイエス伝・イエス像の二つの事例を紹介する。プロテスタントの牧師フリードリヒ・アンダーセンは、当時の通俗的人種理論に依拠して、イエスを「ガリラヤ人」(「アーリア人」と同定し、イエスは当時ユダヤ人支配に苦しんでいたガリラヤ人に対し、妬みの神でも復讐の神でもない、父なる神の愛と、隣人愛を紐帯とする「神の国」の教えを説いたと述べる。イエスは、ユダヤ人であったユダの裏切りによって処刑されることになるが、ユダの裏切りと自らの死を予期しつつも、最期の時に至るまで、愛の神に対して忠実であり、誠実かつ勇敢な態度を示し、英雄的な(「アーリア的な」)自己犠牲の精神を貫き通したとされる。他方、民族主義的キリスト教の著作家アルトゥーア・ディンターは、心霊として創造されつつも罪に陥った(物質性を帯びた)人間の為に、救い主イエスは、悪しき物質的存在の中でも最も霊的存在に近いアーリア人種として受肉し、アーリア人に物質的世界(ユダヤ性)からの解放の教えを説き、その道徳的实践を人間に模範として示したと主張している。

アンダーセンのイエス伝の根幹には、断片的な福音書記事から、イエスの生涯の言行に一貫する連関を見出そうとする意図(それを彼は「非ユダヤ人イエス」像に見出している)と、その連関に基づく文学的創作としてイエス伝を描き出そうとする意図が見られる。こうしたイエス伝創作の雛形と看做されるのは、一八世紀の啓蒙主義者カール・フリードリヒ・バールトのイエス伝(秘密結社エッセネ派教団のメンバーであるイエス

## 第5部会

が、人類を宗教から解放するというプロットに基づく）である。他方、ディンターのイエス像は、イエス像構築の為の資料の不在を、独自の心霊論（降霊術によって諸霊から受け取る奥義）によって克服しようとする試みに基づいている。こうした「新啓示」に基づくスピリティズム的イエス像は、一九世紀を通じて次々と登場しており（アンナ・カタリーナ・エンメリク、ヤコブ・ローバー、ヨハンネス・グレーバー、心霊「エマヌエル」等）、ディンターの心霊論的イエス像もこうした系譜に位置付けられるものである。

他方、このようにイエスを殊更「非ユダヤ人」「アーリア人」として描く、反ユダヤ主義的営みは、同時代の宗教史的文脈においては、一九世紀を通して確立・普及した人種主義的イデオロギーの宗教への適用或いは影響という側面だけでなく、体制的教会変革の実践という特徴も有していた。両者は、「本来のキリスト教」回復の為の基盤を、「本来のイエス」の確定に求め、その根拠を当時の人種理論の中に見出したと捉えることもできる。しかし同時に、彼らの「非ユダヤ的・反ユダヤ的イエス」という表象の虚構性への意識は、本質主義的な人種主義「理論」と結びつくことによって希薄化されていたとも言える。

## ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」 におけることばの問題

古 莊 匡 義

ミシェル・アンリ（一九二二—二〇〇二）は、フッサール・ハイデガーの現象学を受容しつつ根本的に問い直した現代フランス現象学の代表的な思想家のひとりである。アンリが構築した独自の「生の現象学」は、もともとキリスト教的な側面をもっていたが、晩年のアンリは、自らの「生の現象学」の直接的表現としてキリスト教を「再発見」し、聖書のテキストと「生の現象学」とを絡み合わせた「キリスト教の哲学」へと到達した。

本発表で問題にしたのは、この「キリスト教の哲学」を語るアンリ自身の「ことば」の正当性、哲学の「ことば」の語り方である。アンリの思索が宗教的なテキストと濃密な関係をもつことに必然性はあるのだろうか。アンリ自身、「キリスト教の哲学」は哲学だと考えているが、この思索は哲学を自称することが許されるのだろうか。

この問題を考えるために、「キリスト教の哲学」が扱う「ことば」の概念を説明する。アンリは「世界のことば」と「〈生〉の〈ことば〉」とを区別する。「世界の〈ことば〉」は、このことば自身から隔たつたところに、思考や表象や意味を見えるものにする〈ことば〉である。それに対し、「〈生〉の〈ことば〉」は、こ